

☆

小学校の同窓会の報せが届いた。

送り主はやはりと言うべきか、クラスのリーダー格だった奴だ。しかし、そいつがリーダーらしい言動だったことは覚えているのだが、具体的にどんな奴だったかまで思い出せない。

まあ、十年前の事だし——と言うのは勿論言い訳だ。

当時の俺は（今の俺がどうかは物語に関係ないので伏せておく）誰とでも距離を取って、一歩後ろから分かったような顔でクラスを眺めてる奴だった。それが格好良いと思っていた。

そんなの一步踏み出す勇気がないだけだろ？

そう言ってやるべきだったのだ。俺以外の誰かが。

ともあれ俺は小学校のクラスメイト何ぞほとんど覚えちゃいなかった。その場合、この招待状は早急にゴミ箱へと移動すべきなのだが、そこで一人の男子の顔を思い出した。彼の名前は——

伊勢貝^{いせがい}。そう、伊勢貝だ。

この俺が唯一と言って覚えている少年は一言で言えば変わり者だった。二言で言えば電波な変わり者だった。

彼は異世界から来たと小学校の6年間ずっと主張し続けていたのだ。

☆

伊勢貝は5歳になる少し前にこちらの世界へとやって来たのだが、元の世界では魔術師の家系で、両親は共に王立軍所属の一級魔術師。だが四男であった彼自身はほとんど才能なく、優秀な兄を見ては不貞腐れてて育ったみそっかすだったらしい。だからこちらに来たことに特に不満はないそう
だ。

ここまでが本人の主張で、実際それを信じた上で見るに彼の魔術師としての腕は才能がないと言ったレベルではなく、簡単に言うと6年間一度も信じて貰えなかったほどには壊滅的だった。

「無理に隠さなくていいから、暮らしやすくしていいくらいだ」

と震え声。

哀れに思ってしまった俺はわりと彼とは仲良くしていたと思う。

それでも彼は一見虚言癖とも言える癖のわりには憎めない性格で、信じないまでも皆その話を笑顔で聞いてしまうような人気者――

——と言うわけでもなく普通に憎める奴だった。

「水魔術で出すから」と言っっては水筒を忘れ。

「火魔術でやりました」と言っってはマッチを没収される。

なかなか痛くてアホな奴だったので、友達のいない俺しか友達がいなかったくらいだ。

それでも彼は諦めが悪かった。ここはめげなかつたと言うより単純に諦めが悪かつたと言っておく。

「数年修行して一流の魔術師になったら皆僕に平伏すはずさ」

そう言って理科室にマッチを盗りに行く彼の姿は、正しく未来のシーフであった。この修行が身を結ぶ日が来るのか。俺にそれを知る術はない。

——と思っていたのだが、忘れていた今になって再開の機会が訪れた。

もう俺は迷わずに「参加します」に丸を付ける。

☆

そしてあつという間に同窓会当日。

会場の飲み屋に来たは良いものの、思った以上に誰が誰だか分からない。それなのに知らない人同士は既知の間柄であり、彼ら彼女らは俺の事は鼻を垂らしている頃から知っているのだ。こ、怖い。

物理的にも精神的にも落ち着かなくて、うろろう動き回ってはタバコを吸って誤魔化す。だが繰り返しているうちにライターのおイルが切れてしまい、ただうろつく不審者になってしまった。これはまずい。

だけど、それで覚悟がついたのか、何とか一人一人眺めていくと、その中——いや、その奥と言うか外に一人で黙々と料理を食べている男がいる。

間違いない。伊勢貝だ。

20分ほど本当に合ってるかチラチラ確認したり、深呼吸したりした後、ようやく俺はその隣に座りに言った。

「久しぶり、伊勢貝」

「あ……ああ、久しぶり？ 元気してた？」

いけないこのハテナの数は思い出せてない感じだ。俺は名乗った後に当時のエピソードをいくつか列挙して話すと、彼も何とか思い出せたようだ。

「あ——！！ 自称人間観測者の！」

「合ってるけど、それは別の人と言うことで頼む」

来るんじゃない。帰りたい。

でも思い出せたのは事実のようで、一度そうなってしまえば当時のような気軽な雰囲気は何となく戻ってきた。

「いやあ、懐かしいなあ。観測者くんはあんまり変わってないね」

「お前は何かというか……落ち着いたな」

伊勢貝は当時も特別奇抜な格好ではなかったが、今は本当に人ごみに紛れれば消えてしまいそうなほどに普通の見た目だった。

いや、見た目だけじゃなく、喋り方かも当時の痛々しさは消えているようだ。

「もう今は魔力増加用のペンダントとかは付けてないのか？」

「あはは、そんな物もあったね……」

そう言って笑い飛ばす伊勢貝に何故か俺の心は少し痛んだ。

「僕は中学の頃なんか結構痛い事やってたと思うけど、単純にやってることの変人さなら小学生の頃が一番だったよなあ。それでも何だか馬鹿馬鹿しいけど悪い思い出にも思えないのが小学生の凄さだよな」

伊勢貝は魔術師を名乗るのはとつくに辞めていた。中学校の頃は創作ばかりしていてすっかり忘れていたようだ。そこを突っ込んで聞こうとすると、「そっちは本当の黒歴史だからやめてくれ」と本気で嫌がられてしまった。

そう言っつて昔の事を恥ずかしいと言いなながらも、気楽に笑い飛ばす伊勢貝の見て、俺が感じているこれは——間違いなく喪失感だった。

俺自身は虚勢を張ってばかりで、決して踏み込むことのなかった世界。近くで見えていたはずのその世界はとつくになくなっていった。

その喪失を埋めるように俺は酒を飲んだ。

今は酔っつても別の世界に行きたかったのだ。

☆

同窓会はやがて終わり、それぞれは二次会あるいは帰路へと着いた。

俺は結局深酔いしながら伊勢貝とずっと話し続けていた。

最初はついショックを受けてしまったが、過去の出来事はそのままなのだ。

土魔術と言っつて、でかい顔をしてる上級生に泥を投げつけたこと。「俺らだっつて使えるわ！」と突っ込まれつっつ泥を投げ返されて「ラーニングだど!?!」と戦きつつ撤退したこと。そんな下らないエピソードで話題が途切れることはなかった。

同窓会も終わり、俺としては少々話し足りなかつたのだが、伊勢貝はそんなに遅くなるつもりはないらしく、今は二人で駅へと向かっている。

「あーあ、そんな酔って家帰れるのかな？ 解毒魔術かけようか」

「大丈夫、解毒魔術持ってる」

解毒魔術（酔い止め）を水魔術（ペットボトルの水）で飲む俺に「それヒーリングじゃなくてデバフだから」とピンポイントなツッコミを入れてくる伊勢貝。どうでも良い会話だが、どうしようもなく懐かしかった。

そして駅に辿り着く。

伊勢貝は電車に乗るようだが、俺は電車で遠く寝てしまいたいので贅沢にタクシーに乗ることにした。つまりここでお別れだ。

「今日は来るか迷ってたんだけど、来てよかったよ……。僕は仲良かった人も全然いなかったし、本当最初は空気だけ味わって帰ろうと思ってたんだ」

「俺は――」

俺は最初から伊勢貝を見る為に来たと言いかけたが、それは飲み込んだ。彼と再開して少しがっ

かりしたことでまで伝わりそうだったからだ。

「——俺も似たようなことを思ってたわ。……ん、そろそろ電車来る時間だな。じゃあ俺はここでタクシーを待つことにするよ。またいつか飲みに行こうや」

彼も頷いて別れを言い、駅へと向かって行った。

電車が来なければ切り上げるタイミング見失いそうだったな。それにしても今日はちよつと飲み過ぎた。

俺はぼんやりとした頭でタバコを口に啣える。そして火を点けようとするすると横からスつと手が出てきた。

「火の聖霊よ。我が呼びかけに応え、闇を退けし焰となって具現せよ」

伊勢貝がそう言うのとポつと彼の手元が光り、タバコに火が点いた。

「次会う時にはもうちよつと修行積んでおくよ。ばいばい観測者君」

伊勢貝はそう言って俺の手に何かを握らせ、その後は笑いながら今度こそ駅の改札へと消えて行った。

何だ、今でも十分に痛々しいじゃないか。

俺は手を開いて手渡されたものを見ると、それはあまりにも見慣れた俺のライターだった。いつの間にもポケットから奪ったんだか。シーフの修行で次会うまでに捕まっていなければ良いが。

隣に誰もいなくなり、寒さの増す夜の駅前。

しかし、俺の酔いはまだまだ醒めそうにはなかった。